

○牧野標本館雑記(9) (檜山庫三) Kōzō HIYAMA: Miscellany from Makino Herbarium (9)

キビヒトリシズカ (新称) 岡山県吉備郡水内(ミノチ)村で1904年6月27日に森川秀四氏の採集された変わったセンリョウ属の1枚の標本がある。外見はヒトリシズカによく似ているが、3対ある対生葉が明らかに段をなして着いており、また3本の雄蕊のどれにも、その内側に葯を持っている点などは、ちょっとヒトリシズカとフタリシズカとの雑種ではないかと思えたが、中国産の *Chloranthus Fortunei* (A. Gray) Solms にも、記載の上では酷似していることを知った。しかし *C. Fortunei* の葯がはたして内向しているものかどうか不明であったので、東京大学理学部で、かつて松田定久氏が同定された中国産の *C. Fortunei* の標本を水島正美博士に調べていただいた結果、これも内向葯を持ったものであることが判って、岡山県産の者は中国産の者と全く同一であることを確認した。そこで、この植物に新和名を与えてキビヒトリシズカとする。松田定久氏同定の上記標本(浙江省杭州紫雲洞, 1910年4月13日, 本多厚二, # 1013, 1014, 1017—湖南省岳麓山[長沙対岸], 1912年5月2日, 山崎周蔵, # 56)では、1例を除き、4葉が輪生状に集まっている(国立科学博物館にも紫雲洞産の標本が3枚あるが、3対の葉を離れて着けた1株を除けば、皆2対の葉を輪生状に着けている。なお、この標本の採集者名は記していないが、明治43年4月13日採集とあるから、やはり本多厚二氏に間違いない)。この点については、H. A. Solms(in DC., Prodr. 16—1: 476, 1869)も *C. Fortunei* の葉は4枚がむしろ普通であると云っているが、しかし最初の命名者である A. Gray は *Tricercandra Fortunei* の葉は6枚で各対は離れて着くと記しているから、岡山県の者は A. Gray の原記載とよく合致した個体である。要するに *C. Fortunei* では、葉は4枚または6枚であって、枚数とか、仮輪生か否かは分類上の意義を持たない。ヒトリシズカでもたまたま4枚の輪状葉の下に離れて(2cm)更に普通葉を着けたものがある(石狩札幌, 1886年5月22日, 堀正太郎)。キビヒトリシズカの種としての特徴は、花の大きいこと(雄蕊の長さは10mmを越え、ヒトリシズカの約倍長かそれ以上)、葯は雄蕊の内側に着き、中央の雄蕊も常に葯を着けていること、花の基にある苞が大形で明らかに3裂することにある。A. Gray (in Mem. Amer. Acad. Arts & Sci. N. S. 6: 405, 1859)が *Tricercandra* を区別したのは主として糸状を呈する雄蕊の形に重きをおいたのであって、中央雄蕊の葯の有無はあまり問題とせず、ヒトリシズカでも中央雄蕊に痕跡的な葯のあるものを彼は既に観察している。私も中央雄蕊に立派な2胞葯を持った標本(岩代倍夫郡弁天山, 1904年5月4日, 採集者不明—国立科学博物館 # 24628)を見ているし、また菅原繁蔵: 樺太植物図誌 2: 655, t. 307にも、そのような図が載せてある。しかし、これはヒトリシズカとしては正常な姿ではなく、先祖がえり的な一時的現象にすぎない。

次に、朝鮮南部の釜山と巨濟島から報告されたチョウセンヒトリシズカ *Chloranthus*

*koreanus* Nakai) であるが、これは明らかに *C. Fortunei* と同種である。中井猛之進博士(朝鮮森林植物編 18: 14, 1930)は *Tricercandra* を外向葯を有するものに限定されたので、チョウセンヒトリシズカを *Chloranthus* のものとされたのであるが、発表に際しては中国の *C. Fortunei* には言及されなかった。*Tricercandra* を認めるなら、むしろ中井博士の見解において認めることができようが、属として価値は弱い。しかし、朝鮮の者とキビヒトリシズカとでは雄蕊の形状が同じではない。チョウセンヒトリシズカの雄蕊は中央のものが、両側のものよりも短かいために、昆虫の触角のよう

な形となる(これによって中井博士は新節 [sect. *Tentaculares*] を設けられた)。このような雄蕊の形は朝鮮以外には観察されていないから、朝鮮のものは、地理的な分布とも考え合わせて、*C. Fortunei* の変種として取り扱うのが適当である。

西南日本と中国中部との間の植物に共通種の存在が次々と発見されて来ていたが、両地域間には洪積世まで地史的な連帯のあったことが分かって以来、東亜の植物区系地理学的な解明が進み、上の両地域は同一の日華区系として取り扱われるのが通説となった。ここに、その共通要素の一つとして *C. Fortunei* を加える。水島氏及び標本、文献を見せて下さった国立科学博物館の方々には感謝します。

#### ***Chloranthus Fortunei***

(A. Gray) Solms in DC.,

Prodr. 16-1: 476 (1869)—Forbes & Hemsl. in Journ. Linn. Soc. [Bot.] 26: 367 (1891)—Matsuda in Bot. Mag. Tokyo 27: 13 (1913)—Limpricht in Fedde. Repert. 12: 352 (1922)—Hand.-Mazz., Symb. Sin. 7: 156 (1929)—Chien P'ei in Sinensia

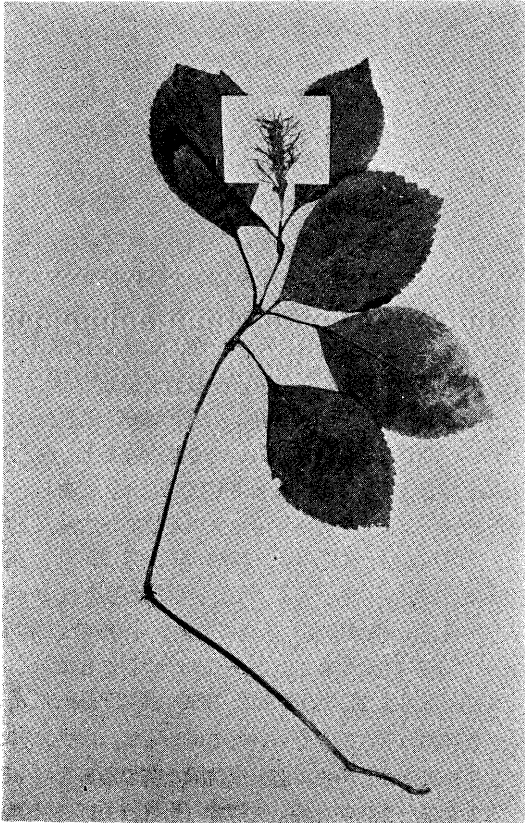


Fig. 1. *Chloranthus Fortunei*,  $\times 0.5$ ; spike,  $\times 1.5$ .

6: 684, f. 8 (1935)—Steward, Man. Vasc. Pl. Low. Yangtze Vall. 70 (1958).

*Tricercandra Fortunei* A. Gray in Mem. Amer. Acad. Arts & Sci. N.S. 6: 405 (1859).

*Chloranthus koreanus* Nakai, Fl. Sylv. Korea. 18: 16 (1930), syn. nov.

var. **Fortunei**.

Hab. Hondo: Minochi-mura, Kibi-gun, Prov. Bitchu (H. Morikawa, June 27, 1904—in Makino Herbarium). Distr. China. This is new to Japan.

var. **koreanus** (Nakai) Hiyama, stat. nov.

*Chloranthus koreanus* Nakai, loc. cit.; in Bull. Nat. Sci. Mus. no. 31: 32 (1952).

Distr. Southern Korea.

Recently I had an opportunity to examine a specimen which was collected by Mr. Morikawa in Prov. Bitchu, western Honshu, about sixty years ago. It is closely allied to *Chloranthus japonicus* Sieb. in appearance, but chiefly differs from the latter in having introrsed anthers. Bract is clearly 3-lobed or cleft, and the segments are obtuse or rotundate at the apex. Stamens are 10mm or more long, the middle one has always 2-loculed anther at the base, and the lateral ones 1-loculed.

From the above-mentioned characters, I have no doubt the Japanese specimen is nothing but *Chloranthus Fortunei* Solms. This species had been known only from China, where it has been collected in Shangtung, Kiangsu, Anhwei, Chekiang, Kiangsi, Hupeh, Hunan, Kwangtung, Szechuan and Yunnan.

*Chloranthus koreanus* Nakai does not seem to be sufficiently distinct from *C. Fortunei* Solms. It can only be distinguished from the latter by its tentacular stamens. But to my knowledge *C. Fortunei* Solms has not been found east of Shangtung, and the Korean plant may be considered as a geographical variety.

**アキヤマミズ** (新称) ヤマミズ (*Pilea japonica* Hand.-Mazz.) で花被に毛のあるものがある。ヤマミズの花被は無毛か、花被片の先端に 1—3 本の毛が出るのが普通であるが、ここに記すものでは花被片の外縁と縁とに毛が生えている。広島県山県郡戸河内の三段峡の産で牧野先生が 1931 年と 1934 年に採集されている。これを産地に因んでアキヤマミズ (forma *pilosa* Hiyama) と新称する。

***Pilea japonica*** (Maxim.) Hand.-Mazz. forma ***pilosa*** Hiyama, nov. f.

Tepala extus et margine pilosa. Cetera ut f. *japonica*.

Hab. Sandan-kyo, Prov. Aki (T. Makino, 1934—type in Makino Herbarium.), ibid. (T. Makino 1931).

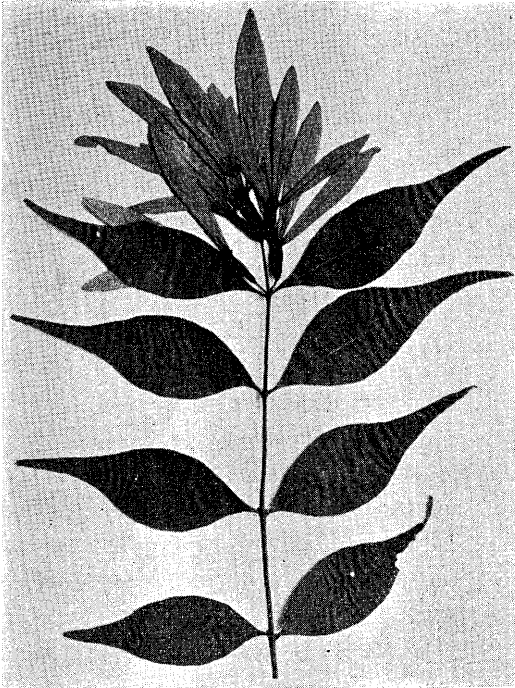


Fig. 2. *Buckleya lanceolata* f. *subtriflora* from holotype, X. 0.5.

### フサツクバネ (新称)

広島県安佐郡川部の南原(ナバラ)峡で1928年に牧野先生が採集されたツクバネ(*Buckleya lanceolata* Miq.)は雌株であるが、最上位の枝の花だけが3花または5花を散房状に着けているので変っている。それ以下の枝では花が単出して、普通のツクバネと変わらない。散房花序の基には1対の普通葉があったりなかったりする。数枚ある標本が全部そうなので、これを一つの品種と考へて、フサツクバネ(forma *subtriflora* Hiyama)と新称する。

***Buckleya lanceolata***  
(Sieb. & Zucc.) Miq. forma  
***subtriflora*** Hiyama, nov. f.

In floribus foemineis:

flores ramorum supremorum 3 vel 5 in corymbum dispositi, ramorum inferiorum solitarii ut in f. *lanceolatam*.

Hab. Nabara-kyo, Prov. Aki (T. Makino, 1928, fruit-type in Makino Herb.).

**ケカキネガラシ (新称)** *Sisymbrium officinale* (L.) Scop. は果実に毛の有る無しで2品に分けて、その有毛品(var. *officinale*)をカキネガラシ、無毛品(var. *leiocarpum* DC.)をハマガラシと呼ばれてきた。ところが、カキネガラシという和名は陸奥上北郡横浜村で明治35年8月に山崎良甫氏が採集された標本に対して牧野先生が命名されたものであって(植雑16:197, 1902)、その標本を見ると、果実は無毛であった。したがって、カキネガラシはハマガラシ(この名は *Coronopus Wrightii* Haraにあるので、別にハマカキネガラシの名もある)と同物であるから、果実有毛の者に改めてケカキネガラシの新名を与える。なお、オニナズナ(高橋良盛? ex 平山常太郎、日本に於ける帰化植物151, 1918)というものは、平山氏によれば果実無毛品も含めた名であることはほぼ明らかなので、有毛品にこの名を採用することはひかえた。(東京都立大学理学部牧野標本館)